

<Note> A Study of the Small Seeds of Psychological Abuse Lurking in Parenting

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 雅宏 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1268">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1268</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 子育てに潜む心理的虐待の小さな芽に関する考察

A Study of the Small Seeds of Psychological Abuse Lurking in Parenting

杉山 雅 宏

SUGIYAMA, Masahiro

## I. はじめに

虐待という本来遠くにあった言葉が、あっという間に社会に浸透したのは、加害者なのか被害者なのか、それがかつてなのか今なのかは別にしても、私たちの誰もが大人になり、思い出せばきりが無い親と子の痛みを抱きかかえて、日々暮らしを織りなして生きているという現実があるからではないだろうか。電話相談の実践ではわが子への否定的な感情を抱くことに悩む親（主に母親）たちの声に接することがある。

本稿で虐待という言葉を使用するとき、外観から識別することが可能な狭義の暴力のみを指して使用するのではなく、マルトリートメントという言葉に示されるような、大人と子どもの不適切な関係を含む広義で使用している（神田・山本, 2005）。たとえば今は軽い育児不安であっても、今後親が態度を変えなかったら明らかに危険が予測されるようなものについては虐待の範疇として捉え、援助の手を差しのべる方策を探る必要はある。

本稿で紹介する電話相談とつながった親からの相談は、虐待と呼ぶほどではないものの、

このまま放置されたらひどくなることも予想される。しかし、こうした親たちの言葉からはある日の自分であったかもしれないということを考えさせられる。

子どもは大人の未来であり希望であり、期待であったから子どもの虐待は起こるのではないか。かつては労働力として期待され、現在では親の空虚さや見栄、精神的充足の道具の1つとして、子どもたちは期待されようとしている。このように考えると、子ども虐待は他人事ではなく、我々の手の中に入ってくる。

虐待は遠くにあるものとして観察者の目で眺めるのと、自分自身の内面を通して見るのとでは見えてくるものが違う。心の目で見合うとき、私だって人間らしく生きたい、幸せになりたいという親たちの心の叫びが聞こえてくる。その願いの真実に寄り添うことで、この世に生を受けた子どもに等しく、愛されるという実感と自分を大切に思う気持ちと、生まれてきてよかったと振り返る人生が手放されることはないのではないだろうか。

電話相談で育児不安に苦しむ親たちの声を聴かせていただいた結果、上記考えに至った。もちろん、子どもの安全があらゆることに優

---

キーワード：虐待、マルトリートメント、役割の逆転  
Key words : abuse, maltreatment, role reversal

先されなければならない。できることは少ないが、声を聴かせていただくというささやかな支援をすることで、背後にふるえる子どもにふれられることになる。子どもたちのためにこそ親に寄り添う必要性を痛感している。

本稿では筆者がこうした考えに至ったいくつかのケースを紹介する。紹介するケースはプライバシーに配慮し、いくつか複数の事例を組み合わせて作成した仮想ケースである。

## II. 言葉の暴力

小学校の教師からの電話。ベテラン教師Aは1年の担任。1年生の最初はお遊びに時間をかける。たくさん甘えさせ、膝にだっこもしてあげ、教師である前に母親のようなスキンシップをクラスの子どもたち全員と共有してから、授業を始めるという。今までもそんな子どもたちがクラスにいなかったわけではないが、最近は数が多すぎて、まとめて『スキンシップごっこ』という遊びに切り替えて子どもの面倒をみている。

ふたりの1年生がAの膝の取り合いになり、ひとりがもう一人を突き倒して机に顔をぶつけ軽い怪我を負わせてしまった。Aは突き倒した子どもに「ダメだよ。ごめんねと謝りましょう」と言っただけであるにもかかわらず、その子どもはAの顔を指さし、「あんたのせいで自分の人生をダメにされた。私の人生を返して！」と叫んだ。

Aは何のこと？自分がこの子に何をしたのだろうと一瞬目を疑った。しかし、すぐに思い当たった。それは、学校の廊下での立ち話でこの子の母親がこの子に何か頼まれても素直にやってあげることができなくて拒否してしまうことをAに相談していて、Aは思いもよらず母親の言葉を子どもの口から聞けたよ

うに思った。

ある時期、Aのクラスでは休み時間になるとひとりの女子が始めた国際電話ごっこが流行った。子どもたちが「パパ、元気？」とママになりすまして電話するまではよいが、その後で、「日本に戻ったら、離婚届に判を押してくださいね」と言っただけで悪びれたふうもなく遊んでおり、Aはびっくりした。子どもたちは家族の中で起きている出来事をごっこ遊びの中で再現していることをAは察知したという。

## III. 心のケアとしてのごっこ遊び

子どもたちの傷ついた心のケアに対するプレイセラピーが公式の治療法であるなら、子どもたちのこうしたごっこ遊びは、非公式の子どもたちが無意識に足を踏み込むセルフケア（自己治癒）の側面がある（細田・吉本, 2019）。

名画『禁じられた遊び』で、主人公の幼い女の子は「お墓ごっこ」をして遊ぶ。なぜ、お墓ごっこだったのかを考えてみると、戦時下の田園風景の中、両親とともにすさまじい爆弾を潜り抜けて逃げる女の子は、途中で両親を亡くすことになる。おそらくおびたしい数の死体にさらされたことだろう。「お墓ごっこ」は死の恐怖にさらされ、幼すぎて言葉で表現できないか、または、傷が深すぎて意識下できない子どもの「傷ついた魂」を癒すために、無意識のうちに進行したセルフケアだと考えられないだろうか。

心理的ショックを引き起こした出来事を子ども自身が意味もなく繰り返すことは、ショック感情をやわらげ克服する効果があり、それをマステリーと呼ぶ。つまり、「辛かったことがあったけれど今の自分はそのおかげで

ある」(小林, 2008) という感覚を持つようになるのである。

そうであるなら、『禁じられた遊び』がそうであったように、心理的ショックをやわらげる意味あるごっこ遊びとは、大人が奨励したい遊びではなく、大人が「禁止したい遊び」の中にこそ含まれているのではないだろうか。「国際電話ごっこ」や「私の人生を返せ」がマスターリーであるかどうかは別として、親がどんなに気をつけてみたところで、日常的に子どもをまったく傷つけずに育児するなどということは、あり得ないことである。その意味で、「ごっこ遊び」の存在は親の味方ともいえる。

たとえば、私たちが知らず知らずうちに傷つけても、子どもたちはごっこ遊びの中で元気を取り戻していかれると考えることはできないだろうか。

しかし、子どもたちを傷つけてしまう親たちはどこでケアしてもらえるだろうか。「私たちだって『ごっこ遊び』が欲しい」という母親の声が聞こえてきそうであるが、たとえば、虐待問題を抱える母親たちのセルフヘルプグループなどは、子どもたちの遊びを言語に置き換えた親のためのプレイセラピーといっても過言でない。そこでは、タテマエで話をしても役に立たない。これまであまり歓迎されてこなかった母親の心の中にたまった澱のような不安や怒りについても話してみることが大切だと考えている。

#### IV. 自分の子どもに対する否定的感情を語る親の声

##### 1. 私は母親以下の人間

母親B。1歳の寝てくれない子どもに、「いい加減にして！うるさい！」と頭ごなしに怒

鳴ってしまう。仕事が順調で職業人としてやっていけるかなという自信はついてきた。そのタイミングで妊娠出産。仕事から一時的に離れることにした。ただの母親以下と思うようになった。人間としても最低の人間になり下がってしまった。こんなに怒鳴られて精神状態がおかしくなるのではないか？しかし、私は子育てマシーンなのか。近所の奥様のお話を聞けば、専業主婦で幸せだと言うけれど、納得できない。

競争社会を一度勝ち抜いてきたのに、今度は誰よりも落ちこぼれてしまった。勉強して頑張れば何でもできたのに、今は誰でもできることができない。劣等感にまみれている自分がある。出産後の生活の激変。経済力も機動力も奪われ、こんなに他人が偉く見えたことはない。夫にはとても相談できない。

##### 2. 子どもに頼まれると損した気持ちになる

小学生と幼児の母親C。子どもから「ボタンつけて」と言われただけで腹が立つ。やってあげると損をした気持ちになる。子どものためにやってあげたくない。ママ友たちは、子どものために生きるのは苦痛でないと口をそろえる。Cは「うるさいわね」と思い、喜んでにこっと笑うことができない。「何でもお母さんに頼らないで」と思ってしまう。

夫からは「君は打算的で異常だ」と言われる。ママ友に相談すれば、「母親になれば甘えられないから」と責められ、説教される。「母親らしい行動をとるべき」と言われる。

##### 3. 子どもを邪魔だと思っている私

小学生・中学生の母親D。子どもが嫌いなのに、産んだために世話をさせられていると思う。上の子はDを無視する。下の子からは

「よそのお母さんはもっとやさしい」とことごとく言われる。自分は仕事をしたい、自由にしたいのにできない。

自分の生きていく道を子どもにとられたという感じ。子どものせいだ。子どもには毎日、「大嫌い」「いらなかったのに」と言っている。

#### 4. 「私の人生を返して」という母親の叫び

乳幼児を抱えた母親の暮らしは、母親が子どもに「使用される」日々の連続である。自分がコントロールできる自由な時間は、出産を境に突然消滅し、子育てに没頭しなければならぬ日々にとって代わる。母親Bのように仕事をバリバリとこなしていた人ほど、それまでであった自分が突然失われて迷子になってしまった心細さや喪失感、他の人が自分よりも偉く見える孤独感、努力しても評価されない欲求不満などを強く感じることになる。

ウィニコットは、新生児期の母親の育児への没頭の強さについて、母親本人が恐れを抱き、自分が植物人間になったのではないかと思うほどだという（井原, 2011）。その没頭こそが、母子一体感や子どもの基本的欲求に応える共感能力を発展させるわけだが、その共感能力の強さゆえ、母親がたった一人で子どもに向き合っていると、重圧を感じ、真面目な人ほど燃え尽きていくような息苦しさを味わうことに周囲は気づく必要がある。

子どもと母親の間に上手に割り入ってくれるもう一人の大人がいて、母親に休みを与えてくれれば解消されることも、核家族であれば望めない。思うように動いてくれない子どもへの憤り、子どもをダメにしてしまうのではないかという不安に加え、他の母親たちは自分よりもわが子とずっと上手くやっていけるに違いないという焦燥感に襲われる。さら

に、仕事で自己実現したい欲求、そして、女性は本能的に子どもを産み育て愛情を持つとする母性愛神話に追い打ちをかけられる（大日向, 2011）。

子育てなどどうでも良いと思っている母親ではなく、子どもを愛し自分たちに期待された役割を見事にこなそうとして傷つき、自分への信頼と自信をすっかり失ったとき、母親はわが子に「あなたなんか産まなければよかった」とか「私の人生を返して」と、わざわざ子どもの心を砕く言葉を言ってしまうのではないだろうか。

これらを避けるために、「心の中で思うこと」と実際に子どもに向かって「口に出して言うこと」は、まったく別のこと、つまり、心の中では何を思ってもいいんだと自由しておくことである。むしろ、24時間子どもに使用される生活を強いられている母親なら、否定的感情を抱くことの方が正常な反応ではないだろうか。決して子どもに向かって吐きだしてはいけない、自分を取り戻したいという母親の思いが電話の向こうから聞こえてくる。

#### V. 考察—完璧を求める母親—

子どもを虐待してしまう母親たちの告白を聞いていると、いかに社会が母親たちに自己犠牲を強いてきたかがわかる。

##### 1. すこし悪い母親もほどよい母親

自分自身、競争社会をやっと勝ち抜いたと思ったら、わが子が自分の思うようにならず、落ち込んでしまったと嘆く母親Bの声を紹介した。Bのように、他人と比較して勝つだけで、自分の存在を確認するような生き方をしてきた人は、わが子が他の子どもたちと比べ

劣っていると感じられると、自分の母親としての存在が揺らいでも不思議でない。

しかし、これがBだけの姿なのかと問えば、ほとんどの母親の姿といえるのではないか。

人生の途上で未熟なままにしか親になれない母親たちは、他者のまなざしに映る自分の姿に一喜一憂し、自らが抱える生きづらさを子どもを通して解決しようとする。

たとえば、自分がかつて望んだ大学に子どもを入れようとしたり、夫に失望して代わりに子どもに名声を得ることを期待したりする。しかし、強制することと期待することは別である。親の望みに隷属させさえないければ、わが子に期待することまでやめる必要はないだろう。子育ての始まりには、いつか夢が壊れることは予測しているものの、それでも母親たちはたくさんの夢をみる。たとえ、「それはあなたの自由よ」と理解ある母親を演じてみたところで、子どもたちは親の感情や本音をきちんとかき分ける。

自分自身がなりたい、美しくよい母親よりも、少しくらい悪いくらいの母親が、子ども自身も自分の悪さ弱さを受容でき、それが子どもへの貢献となり、ウィニコットのいう「ほどよい母親」の部類に入れてよい、このあたりが現実の母親の姿ではないか（深津, 2010）。

## 2. 子どもの心を育てたい母親

自分のやりたいことは十分にやりつくしてから母親になった40代Eからの話である。子どもの心を何よりも大切に育ててをしようとしていた。

しかし、Eの息子は2歳を過ぎても言葉が出ず、歩く様子もなかった。ときどきパニックを起こしたように泣きわめき、母親のやさしい言葉にも耳を貸そうとしない。ある日、

「私の何が気に入らないの」と彼女は子どもをベッドにたたきつけるように放り出してしまった。

自分の行為に驚いたのはE自身で、自ら助けを求めて保健センターに駆け込んだ。スタッフは母子を見て、問題はすぐにわかったという。すでに2歳になっているのに室内履きのような布製のかわいいベビー靴を子どもにはかせている。これでは外を歩かないでといっているようなもの。泣かせないように抱き上げ、足が疲れないように抱き上げ、毎晩ベッドの脇に付き添い眠くなるまで絵本を読み聞かせる。お腹がすけばオンタイムで食事を与え、飲み物を欲しそうな顔をすれば欲求する前から目の前に差し出す。これでは子どもは欲求不満になれない。欲求不満を抱えパニックを起こしていたようにみえたという。

乳児の怒りは無制限で、相手を滅ぼしてしまふほど不適切な怒りと呼ばれ、親に見捨てられるという不安が育っているからこそ、その怒りを無邪気に出せるといわれる。Eも2歳の息子の不適切な怒りに巻き込まれ、子どもを放り投げさせられたようだ。

完璧を求める母親には、いつも必ずその人なりの理由が潜んでいる。この母親は高齢出産だったため、自分は若い母親たちよりも子どもと上手く接することができて当たり前と思込み、子どもの心を育てる育児に心を砕いてしまった。彼女は、子どもが泣くと自分が非難されているように思い、先回りしては子どもを泣かせないようにしていたのである。

母親が育児に完璧を求めすぎると、子どもは真綿で首を絞められるような、怒りを表しているのか表してはいけないのか、自分の感情の所在が分からなくなっていくようだ。乳児は親に見捨てられる不安をまだ感じる能力



はない。その分、無邪気に泣けるわけであるが、年齢が上がるにつれて、それが困難になっていく。表面に出せず内面に蓄積された怒りは心を痛めていく（筒井, 2008）。

### 3. 母親が自分を犠牲にして奉仕する

5歳の娘に「ママは私のためにやっているのだから、パパもママと一緒に私のこと殴って」と言われ、児童相談所に相談したことがあるという父親Fからの相談があった。

3歳から始まったFの妻の早期教育熱は、娘の有名小学校受験を数か月後に控えていっそう加熱した。漢字の書き順が違う、時間内に計算が終わらないといった娘を叩き、朝食を抜く、ときには幼稚園を休ませたという。

Fが「今はそういう時期だろうか。砂場で泥んこ遊びをさせたり、友だちと遊ばせたりする方が大切ではないか」と言えば、妻は「あなたのような男性にたくない」といい、夫に責任転嫁してくると言う。

ある日、消しゴムで消したあとが綺麗でないといいがかりをつけ娘を叩き、何度もやり直しをさせている妻の姿に接したとき、Fも我慢の限界を超え、大声で妻を怒鳴ってしまった。そのとき、「ママのために」という言葉を5歳の娘から聞かされたのは、「パパ助けて」ならいざ知らず、母親を擁護するような言葉を5歳の子どもに言わせてよいのだろうか」とFは悩み、戸惑いながらも児童相談所を訪ねることにした。当時は、日常生活に支障をきたすほどの精神症状がないとの理由で、「家族でもっと協力してほしい」と言われた。

#### (1) 不適切な関わりという意味での虐待

1989年に国連で採択され、1994年に日本でも批准された「子どもの権利条約」の考え方

を取り入れ、子どもは、未熟な大人でも大人の附属物ではなく、今という時間をよりよく生きる一個の人格として扱わなくてはいけないというウェル・ビーイングの考え方を虐待の定義に採用すると、母親の娘への「強迫的な学習への駆り立て」は5歳という発達に見合わない早期教育の強要として虐待といえる（渡部, 2019）。

Fの妻の行為は、大人の子どもに対する不適切な関わり、つまりマルトリートメントといえる。子どもの人権の立場から「子どもの最善の利益」（子どもの権利条約第3条）を追求して行われなければならない、親が一生懸命行うしつけや体罰についても、子どもの立場に立てば、不適切な養育であることは疑いの余地がない（西澤, 2017）。

#### (2) 親の欲求を満たそうとする子どもたち

電話相談の中でFは、「通常、虐待の場合であれば、娘は母親を怖がるはずなのに、それがママ大好きで、一歩外に出れば二人は見るからに仲良し親子で、近所の人に会えばにっこり挨拶をする。幸せな親子にしかみえません。それでも虐待といえるのでしょうか」と「虐待」という言葉に納得がいかない様子であった。同じような早期教育をしている母親がいるとして、もう少しいい加減で、自分がテレビドラマでも見たかったから、「今日は勉強をやめておこうか」と言ってしまうような、子どものためにも努力はするが、自分のやりたいことも優先し、子どもからみれば自分の生活を楽しんでいるような母親のそれであれば、子どもたちはおそらく「ママやめて!」と言えたのではないだろうか。

「ママはあなたのためにやっているのよ」と母親が子ども以上に力をいれて頑張っている

る姿を目の前で見せられたら、子どもたちは母親が自分のために犠牲を払っているように感じられ、心の中では「今日はお勉強やりたくないなあ」と思うことだけでも罪悪感を感じることがある。「パパ、私を殴って」と言ったのは、その方が自分には相応しいと思ひ、思わずそうやってしまったのだろう。

子どもたちは、一番大切な親に見捨てられるのが怖くて怒りを抑圧してしまう。大人になり子どもを上手く愛せないと悩む母親たちは、「子ども時代、親の欲求を生きて、自分自身の感情を押し殺していた」と、まさにトラウマを抱えた養育者なのである（亀岡, 2019）。

Fが娘を何とかしたいと思うのは、子どもが母親になることを見通すうえでも重要な問題である。Fによれば、妻は高校受験に失敗、両親に恥ずかしいといわれ、自宅近くに來ると、高校のバッジを隠して歩いたという高校時代だった。娘を優秀にし両親の希望に沿いたいと、大人になっても子どもを通して競争をし続けているのが、Fの妻であった。Fの妻は、競争に勝つことを「愛情」や「安全感」とすり替えて生きていくようにも見える。

### （3）親子の役割の逆転

「パパもママと一緒に私のこと殴ってよ」という言葉の背景には、夫婦関係に強い葛藤があり、精神的に不安定になっている母親が子どもに対して「あなただけが頼りだから」と、絶えず愚痴をこぼしている姿が想像できる。空虚な心を子どもに埋めてもらおうとする母親とその慰め役をする娘の役割は逆転している。Fの妻は、「子どもが親を幸せにし、親を満足させるものだ」と思い込んでいる。これは虐待をする親子関係によくみられる。Fは何とかして妻の娘への「虐待」を止めた

いと願っているわけであるが、妻は夫への怒りを娘にぶつけているようにも見える。

「母親が子どもの勉強をみているらしい。ちょっとでもできないと、子どもをののしり、壁を叩く音が聞こえてくる。しかし、父親が帰宅するころには、静かになります。父親は知っているのか」というセリフは虐待の通報者から聞かされる（田原, 2019）。育児に参加せず、無関心な夫への怒りを子どもに置き換え、そこに虐待が生じる可能性は否めない。

## VI. まとめ

ウィニコットは、子どもに使われることができる母親が安全なのだという（井原, 2014）。同じ意味のことを児童虐待に詳しいスイスの精神科医アリス・ミラーは、子どもとは本来「非社会的な存在」であるべきで、貪欲で自己中心的で傲慢、そんな子ども時代を長期にたっぷりと過ごすことができた子どもたちこそは、大人になってわが子から自分の失われた子ども時代を奪おう（虐待）とはしないといっている（アリス・ミラー, 1983）。

非社会的な存在については次のように想像してみたい。たとえば、子どもが小さいときはとても育てやすい子で、よく飲みよく眠り、機嫌もよくかわいかった。ところが、小学校4年生くらいから反抗的になり、顔は洗わない、歯も磨かない、宿題すらやらない、母親が何か言えば「うるさい！黙れ！クソババア」と暴言を吐くとする。母親はどうしていいのかわからず気がつけば売り言葉に買い言葉で「死ぬ」「殺してやる」などの言葉の暴力が止まらないと悩んでしまう。そうした場面で妻をなだめるために夫が「僕みたいに子どものころ、万引きする、喧嘩して相手に怪我をさせる、そんな経験をしながらいはマトモに育



つものだよ」という言葉を聞いたことはよくあるだろう。ウィニコットやアリス・ミラーほど格調は高くないが、我々親も同様の意味のことを言ってきたのではないだろうか。

子どもが隣のいい子と違い反抗的でどうしてこんなになってしまったのだろうと悩むとき、このアリス・ミラーのメッセージを思い起こしてはいかがだろうか。慰め役からも遠い、わが子と自分との関係に少し安心感を覚えるかもしれない。

親にも、病気や事件や家族問題に巻き込まれ、きちんと保護者をするゆとりも気力もなくしてしまう日々がしばしばやってくる。子どもから慰められ、労われ、そうした元気を取り戻していけることも、長い子育て生活の中では当然あるだろう。どこが虐待と違うのか、それは、自分が今は子どもに負担をかけている、そのことさえ忘れなければ、親の役割に戻れるはずである。自己と他者に境界があるように、親子にも境界は必要である。自分の失われた子ども時代をわが子から取り戻すところで起きる役割の逆転と、ある時期の親子の間の逆転や助け合いを混同して虐待と考えると、暗く落ち込むことはないのである。

## <引用文献>

- ・アリス・ミラー 山下公子訳 『魂の殺人 親は子どもに何をしたか』 新曜社 1983年 97-100
- ・井原成男 Winnicottにおける生き残ることと対象の使用の逆説 お茶の水女子大学人文科学研究10 お茶の水女子大学 2004年 181-193
- ・井原成男 ウィニコットの臨床的コンセプトについて考える お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要 13 お茶の水女子大学心理臨床相談センター 2011年 63-72
- ・細田直哉・吉本和子 特集 遊びの援助とは何か：ごっこ遊びから読み解く：対談 げ・ん・き 173 エイデル研究所 2019年 2-25
- ・深津千賀子 親のメンタルヘルス（7）「ほどよい母親」そして「ほどよい父親」 子育て支援と心理臨床 7 福村出版 2010年 108-111
- ・亀岡智美 ト라우マを抱えた養育者への子育て支援 こころの科学 206 日本評論社 2019年 66-69
- ・神田直子・山本理恵 子どもの「育てにくさ」と親の育児不安（マルトリートメント）（3）1歳から6歳の横断的分析および3年間の横断的分析より 児童教育科学論集 38 2005年 1-12
- ・小林正幸 小林正幸・橋本創一・松尾直博編『教師のための学校カウンセリング』有斐閣アルマ 2008年 71-72
- ・西澤 哲 しつけと虐待（第3回）虐待臨床の視点から チャイルドヘルス 20（3）診断と治療社 2017年 218-220
- ・大日向雅美 2011 母性愛神話と今日の子育ての課題（2010年度公開シンポジウム報告 父親の子育て 母親の子育て）心の危機と臨床の知 12 13-22 甲南大学人間科学研究所 2011年 134-22
- ・田原俊司 子ども健康相談室 児童虐待の判断基準について 児童虐待を受けていると思われる子どもの通報後の処遇の流れ 心とからだの健康：子どもの生きる力を育む 23（4）健学社 2019年 33-38
- ・筒井潤子 “見捨てられ不安”から“自己回復”へ ある事例の振り返りとその叙述の試み 都留文科大学研究紀要 68 都留文科大学 2008年 1-20
- ・渡部真奈美 教育虐待、教育ネグレクトを知っていますか？ 朝日大学保健医療学部看護学科紀要（5）朝日大学 2019年 35-37